

小学6年からできるがん予防

がん社会 を診る

中川 恵一

皮内がん」を含めると、発症のピークは30代前半です。この年代は出産のピークでもありますから、子宮頸がん問題は少子化対策としても重要です。

HPVはありふれたウイルスで、成人女性の大半が感染経験を持ちます。発がんに至るのは感染者のごくわずかにすぎませんが、このウイルスの感染がなければ子宮頸がんを発症する可能性はほとんどありません。性交渉を開始す

る前にHPVに対するワクチンを接種することで、予防することが可能です。

スウェーデンの調査では、17歳未満で接種した場合は子宮頸がんのリスクは約1割まで低下していました。一方、17〜30歳の接種では、リスクの低下は5割程度にとどまりました。

英国の別の調査では、12〜13歳で接種した場合、子宮頸がんの発症リスクは、スウェーデンの結果と同様、1割近くまで減りました。しかし、14〜16歳の接種では6割、16〜18歳では3割と、発がんの予防効果は、年齢とともに減少してしまいました。性交渉開始前の接種の大切さが分かります。

子は法定接種の対象外ですが、女子と同様、小学校6年から有料で接種が可能となっています。

HPVは子宮頸がん以外にも、中咽頭がんや肛門がん、陰茎がんなどの原因となりますから、男性にとっても人ごとではありません。このため、オーストラリアでは88%、米国では64%の男性がHPVワクチンを接種しています。

しかし、日本では「副反応」がセンセーショナルに報道されたこともあり、国は定期接種を開始した2カ月後の13年6月に「積極的勧奨」を差し控えると発表しました。以降約9年間、ワクチン接種は事実上凍結され、接種率も数%と低迷を続けています。

しかし、この4月から、ようやく積極的勧奨が再開され、小学校6年〜高校1年の女子生徒に通知が届くようになりました。

小学6年生でのがん予防が広がることを願っています。

(東京大学特任教授)

小学6年からできるがん予防があることを存じてしょうか。がんは細胞の老化といえる病気で、年齢とともに発症リスクが高くなるのが一般的ですが、例外もあります。その代表が子宮頸(けい)がんです。このがんは「感染型」のがんの代表で、発症原因のほぼ100%が性交渉に伴うヒトパピローマウイルス(HPV)の感染です。

性交渉の若年化などにより、子宮頸がんの若年化も進みました。もっとも早期の「土



イラスト 中村 久美